

別子山村郷土誌と別子山村史

平成28年11月12日(土)10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

1. はじめに

別子山ふるさと館のガラスケースの中に陳列されていた別子山村郷土誌を借りて、その写しを別子銅山記念図書館の郷土資料室に収めた。手書きなのでとりあえず活字化して読みやすくした。明治の手書きとはいえ、所々に難解な文字が出てくる。伏字を入れて作業をするが、伏字は何としても読まなくてはならない。くずし字辞典を引きながら読む。否が応でも最初から最後まで読んだ。

附録の別子鉦山案内記の写しがある時に偶然見つかった。それもセットで図書館の郷土資料室に収まっている。「大鉛の歌」「別子鉦山案内記」の題名で既に解説もした。兎にも角にも思い出の多い本である。

精読すると別子山村史にどのように反映されているかとの興味がわいてくる。別子銅山に関する箇所を読み比べてみようと考えたが、再掲や書き直しなので新たなものはない。それでも気になった箇所をとにかく読み比べてみる。

2. 本の刊行

別子山村郷土誌	明治44年12月	末	調査完了	
	明治45年	4月	1日	起稿
	明治45年	6月	21日	脱稿 (未刊のまま)
別子山村史	昭和52年	8月	20日	村史編纂委員会発足
	昭和56年	1月	25日	発行

3. 本の構成

別子山村郷土誌

第一編 自然誌

- 一 位置
- 二 境界
- 三 広袤^む及び面積
- 四 地勢
- 五 地体
- 六 気候
- 七 生物
- 八 変災

別子山村史

第一編 別子山村と別子銅山

- 第一章 別子山村のはじまり
- 第二章 別子銅山の発見
- 第三章 明治末期までの別子銅山
- 第四章 製錬工場の歴史
- 第五章 輸送路の変遷
- 第六章 坑内の排水処理
- 第七章 燃料の集積と用水の確保
- 第八章 災害の状況

第二編 人文誌	第九章 別子争議と対策
一 沿革	第十章 別子銅山開発史
二 大字区画	第十一章 別子銅(鉦)山歴代主管者名簿
三 戸口	第十二章 別子銅山閉山
四 官衙及び公署	第十三章 別子山村の生きる道
五 経済及び財政	第二編 自然環境
六 生業	第一章 位置
七 教育	第二章 境界
八 軍事	第三章 面積
九 神社	第四章 地形
十 宗教	第五章 地質及び土壌
十一 民俗	第六章 別子山村の地下資源
十二 衛生	第七章 未開発地下資源
十三 交通	第八章 別子山村要図
十四 各種団体	第九章 気候
十五 名所旧跡	第十章 生物
十六 古墳、碑、遺跡等	第三編 別子山村の過疎地域振興計画
十七 古今著名人物小伝	第四編 別子山村有林経営計画(以下各章省略)
第三編 結論	第五編 行政、財政
附録 鉦山案内記	第六編 交通、通信
(平成 24 年原稿発見)	第七編 産業
系譜	第八編 教育
	第九編 社寺
	第十編 民俗
(ゴシック体は村史への引用箇所)	第十一編 地名と伝説
	第十二編 人物
	第十三編 御用廻章写真帳
	第十四編 別子山村役場と住友鉦山会社との 往復古文書
	第十五編 別子山村及び旧別子案内

4. 郷土誌の村史への反映

第十編 民俗

(斜体は村史の編を示す)

○大鉞唄

「大鉞歌は別子銅山の元旦行事の鉞祭と称する古式でのみ歌われる。歌詞は百年以上の昔に作られたが、作者や起源は不詳である。節回しは大阪で天神社建

築用材を曳くときに歌われる木遣節の説がある。」との説明は書き留ていない。なぜだか囃子詞が書かれている大鉋歌の1番の歌詞が欠落している。別資料と読み誤ったようである。

五番の歌詞の「やまどめ志ゆ一」は「山留衆」と書き留ている。現在の歌詞の「山留じゅう」「山留中」が誤記であることが分かる。また、「大鉋酔」の「酔」に「エイ」とルビがふられているのは書き留めている。その後の「エイ」を「エイをエと短縮してのエ=絵」、「絵の糸偏が欠落した会」、「会を書き誤った倉」の変遷を逆に示している。「大鉋絵」「大鉋会」「大鉋倉」が間違いであることが分かる。さらに、現在の歌詞の3番と4番の出だしの部分が入れ替わっていることも分かる。「歳の初めに始まる月は」と「明けて目出度い始まる歳は」が入れ替わっている。

○セツト一節(ビツチョコ節)

説明文は要約して書き留めている。歌詞も1番から18番までそのまま書き留めている。

○銅山鍛冶職の唄

歌詞1番から6番までそのまま書き留めている。

○木挽唄

歌詞1番から4番までそのまま書き留めている。

○一般の労働者の唄

歌詞1番から8番までそのまま書き留めている。

○牛若踊り

歌詞の前半部として書き留められている。

○手鞠唄

歌詞1番から15番までそのまま書き留められている。

○お手玉唄・セッセッセ・中の小坊さん・鬼ごっこの鬼を定める時・草履かくし

歌詞が全編書き留められている。

○子守唄

歌詞1番から10番までそのまま書き留めている。

- **第六編・交通、通信** 八・別子山村交通の概要 交通 (一)沿革 全文掲載
- **第七編 産業** 別子銅山鉱夫雇及労務規則 全文掲載
- **第八編・教育**
 - 第三節 村立小学校変革 全文掲載
 - 第四節 私立別子尋常高等小学校変革 表で全文掲載
 - 第六節 別子鉱業所別子講習所 全文掲載
 - 第九節 私立住友別子小学校役職員 表を掲載
- **第十二編 人物**
 - 三 近藤氏系図及び・旗紋・幟 全文掲載

5.別子山村史の再掲部分等

○旧別子銅山案内(昭和44年に新居浜山岳協会・銅山峰ヒュッテ刊行)から再掲

- 第一編 別子山村と別子銅山
 - 第二章 別子銅山の発見
 - 第三章 明治末期までの別子銅山
 - 第四章 製錬工場の歴史
 - 第五章 輸送路の変遷
 - 第六章 坑内の排水処理
 - 第七章 燃料の集積と用水の確保
 - 第八章 災害の状況
 - 第九章 別子争議と対策
 - 第十章 別子銅山開発史 中の「別子銅山本山坑略図」

※ 再掲された「旧別子銅山案内」(昭和44年に新居浜山岳協会・銅山峰ヒュッテ刊行)は、来年2月19日の第5回別子銅山を読む講座で解説する。

○別子閉山(昭和47年戒田淳)から再掲

- 第十二章 別子銅山閉山

○旧別子案内(昭和53年に別子銅山記念館から刊行)の再掲及び踏査風に再掲

- 第十五編 別子山村及び旧別子案内の「旧別子案内」
 - 別子山村と旧別子 再掲
 - 別子山村銅山部落一覧表 再掲

(1) 別子銅山入口 ～ (25)第三通洞

踏査風に再掲

※ 嶺北の角石原停車場跡、第一通洞北口、千人塚、第三通洞は新居浜市である。

※ 誤記があるので訂正する。

1旧別子入り口

旧別子とは元禄4年から大正5年までの225年間 → 226年間

銅山越えをこえて角石原まで約2時間 → 愛媛の山(山と溪谷社)のコースタイム3時間
(P149の赤石山系コースタイム表による) 体験実働でも3時間である

2円通寺小足谷出張所跡

草原のなかに

→ 木立の下に

3小足谷付近

醸造業の跡

→ 醸造所の跡

清酒や醤油

→ 清酒や味噌・醤油

5小足谷小学校跡

小足谷小学校は明治6年小足谷部落に設立

→ 明治6年目出度町に私立足谷小学校を創設した

6小足谷劇場

大劇場が建設された

→ 開坑二百年祭に合わせて炭倉を劇場として開放した

幅18mの回り舞台

→ 建屋の幅が18m

建物に山林課と土木課の事務所

→ 劇場の外に山林課と土木科の事務所

7ダイヤモンド水

病院跡

→ 病院の出張所跡

地下600mから絶え間なく噴く水

→ 傾斜45度で金鍋鉱床の延長を探索して掘った地下から

8高橋溶鉱炉

砕女のふる鋸の音も聞こえてきそう

→ 砕女は坑口前で碎石していたので離れたところで作業していた

左して行くけは目出度町へ出る

→ 歓喜坑・銅山越え

10代々坑

- 人道、牛車道 → 鉄道馬車
- 870mの隧道 → 1021m
- 銀行 → 住友銀行の出張所

11東延

- 明治初年仏人ラロックを招いて → 明治7年仏人ルイ・ラロック
- 50度の傾斜 → 49度の傾斜
- 580m → 526m

12木方焼鉱窯と重任局跡

- 重任局の屋根の上にはやぐら太鼓
(明治2年)がおかれ → 明治12年に組織改革で勘場を重任
局の名称に改め、屋根に太鼓を設置

14大山積神社跡

- 元禄4年開坑間もなく勧請 → 元禄7年の大火の後に

15目出度町鉱山街入り口

- 重任局、勘場、 → 明治12年に組織改革で勘場を重任
局の名称に改めた
- 小学校分教場 → 明治6年目出度町に私立足谷小学校を創
設したので分教場ではない

17蘭塔婆跡

- 杉本七助以下132人の霊を祭る → 蘭塔場には観音堂を建てた。七助ほか3人
の手代は歓喜坑の下手に葬った。ここを蘭
塔場と呼んだ。他はそれぞれに葬った。

21銅山越

- 元禄4年から大正5年までの225年間 → 226年間
- 幅1000m → 幅1500m

22角石原停車場跡

- 762mの軌道 → 762mmの軌道

23第一通洞北口

- 標高1300mの銅山越 → 標高1294m
- 1010mの第一通洞 → 1021m
- 人車、牛車 → 鉄道馬車

24千人塚

明治9年着工、明治13年完成の牛車道 → 上部鉄道を牛車道に建設したので、上に付替えられた牛車道

25第三通洞

東延斜坑底までの1818m → 1795m

延長2020mの日浦通洞 → 2120m

6. 郷土誌と村史の違い

○別子山村の始まり

別子山村の始まりの資料はない。郷土誌は文治5年(1181)の近藤平之丞藤原季清が近江国北泉(現在の甲賀市水口町北泉)から移り来たとの伝承を紹介している。

村史は平家落人伝説から寿永4年(1185)の屋島の合戦での平家滅亡から書き始めている。そして落人が五良津から保土野に来たとしている。落人なので土佐街道の峨蔵越えでなく、間道の権現越えとしている。人が住んでいない時に街道と間道の違いがあったのだろうか。想定で書いているので、落人だから間道との作為がある。

※ 郷土誌の統治者変革に見られるが「石鉄県」とあるのは、「石鉄県」である。「鉄」は常用漢字表にない字がなくてFeの「鉄」を代用したことからの誤記が広まった。石土山、石鎚山に由来する地名なので「いしーつち」は「いしーおの」で「石斧」にあたる。木製品や金属製品は日常的に使うので木槌、金鎚として知っているが、石製品はほとんどが金属製品にとって代られて日常的になじみにくくなってきたことにもよる。

○明治32年の別子大水害

郷土誌にはページ数を割いて詳細に報告書のように記載しているが、村史は旧別子銅山案内を再掲したので、写真を7枚掲載しているが簡単に記述している。

○私立住友別子尋常高等小学校の教育レベル

郷土史には、明治42年に名古屋市展覧会出品請校に県から指定され、県知事臨校するとの記載がある。山中の学校であるが県を代表する学校に選ばれる教育レベルの高さがあった。

○人物伝

郷土史には、別子銅山関係者として、切上がり長兵衛、広瀬幸平、杉本勘七、美田秀蔵を紹介している。広瀬幸平については半世物語を要約してページを割いている。近藤半之丞藤原季清については各所で紹介し、系譜を末尾に掲載している。南光院阿闍梨快盛法印については宗教の部で紹介している。

村史では、近藤半之丞藤原季清を平家落人説をとっているので系図の初出に疑義を唱えて書き始めている。大湯の古墳や湯水も引用しているが伝え聞くことのものである。近藤盛次については元禄時代の庄屋であったので、元禄のころの別子銅山の話に終始している。近藤九郎右衛門盛俊についても別子銅山に絡む境界争いの庄屋としての話となっている。南光院快盛法印については郷土史の「南光院造営の由来」によっている。村民として和田義邑、近藤嘉平太、藤田米次郎、妻鳥良諦師を紹介している。

7. おわりに

別子山村郷土誌は、明治から大正への移行年に原稿がまとめられた。西暦1912年である。調査は前年の明治44年(1911)末で終わっており、交通、産業、教育、民俗に関して再掲しているし、人物についても一部活用しているので、明治後期の様子がかがえた。原稿をまとめた年で見ると105年前である。

別子山村史の発行が、西暦1981年なので別子山村郷土誌の発行から69年が経過している。しかし、別子銅山についての主要な記述は、旧別子銅山案内(新居浜山岳協会・銅山峰ヒュッテ刊行)からの再掲であったり、別子閉山(昭和47年戒田淳)や旧別子案内(別子銅山記念館刊行)の書き直し再編集といったところである。郷土史を資料として読むだけでなく部分的に活用している。大鉛唄と別子大水害については歴史的資料として価値が高い。百年前が今となって眼前に広がる。古い文書を読む醍醐味を味わった。利用資料を見ておこうと図書館で検索すると、「えひめのふるさとこみち」がない。「愛媛県教育委員会」で調べるとあった。書名は、正しくは「えひめのふるさとこみち」であった。

別子山村史は、文末に利用資料を掲載している。

- ・別子山村役場公文書・総合開発計画書・広報誌
- ・別子山村郷土誌 (なぜだか明治37年執筆となっている。)
- ・住友関係文書
- ・別子銅山(合田正良)
- ・旧別子銅山案内(新居浜山岳協会・銅山峰ヒュッテ)
- ・えひめのふるさとこみち東予編(愛媛県教育委員会)
- ・別子閉山(愛媛地方研究会)
- ・愛媛大学地域社会総合研究所報告書
- ・赤石山系の自然(伊藤玉男)